



▲お水取りに欠かせない梅の海り花、毎年、墨紅(紫)と和紙(白)の和紙、黄色の和紙を60枚を準備し、進行案の手で「花拵(はなこしら)え」される



▲薬師寺の花会式の海り花、牡丹(かきつばた)に使用される紫根染めの和紙の紫がひとまわりの花



▲清水八幡宮(奉納される)花拵の桜の海り花、薄い(シ)ンクも紅花染め



匠の息吹

道を求める女性たち

3 染織家

吉岡 更紗さん

深みのある茶の花弁用には紅花、黄色の花弁用は紫の染料が、何度も塗り重ねられている。「お水取り」で知られる奈良・東大寺修二会の本堂の海り花に使われる染和紙、季節にもなっている「寒の紅」。寒中についた紅は、色が鮮明で美しいといわれる。「きれいな色を出す」と思えば、気温は湿度が重要だ。植物染料を追求する「染司よしおか」の6代目岡更紗さん(40)。年末から年明けにかけて、京都市伏見区の工房で紅花染め本番を迎える。

想いの仕事と想っていた「染織」の原点を、美意識出版を手がけていた父幸雄さん(71)が継ぎ、而立させる姿を間近で見たことも背景にある。10歳ごろのことだ。祖父は厳しい人で、子どもが工房に入るとおどろかされた。道に興味があり、幼いころからのぞき見て育った。2001年、幸雄さんが法隆寺伝来の「国至一四騎獅子狩文錦」の復元を引き受けた。往時の色と文様を復元するため、工房に設備を設けた。その復元過程を目撃し、「染めただけでなく、糸の太さや織りの複雑な構造を理解する」ことも必要と感じた。体系的に学ぶため、愛媛県西予市の市野村シルク博物館が開く染織講座を受講した。現地に移住して約2年、養蠶家を手伝いながら、職かたの糸作りが始まり、染色、手織りまでを一貫して身につけた。

誰かが引き継ぐべき大切な仕事

先人生んだ色を後世に

植物染め

花や葉、根、茎、実、樹皮など、草や木から採取した材料を染料として糸や布を染め付ける伝統技法。「染司よしおか」では、紅花や藍、ドングリなどの染料はもちろん、稲わらや樹木の灰、ミョウバン、鉄など染料を定着させる媒染も含め、昔から主に日本で使

われていた記録の残る原料と技法で、自然の発色を引き出す。明治以降、化学染料が輸入され、ほとんどの染色業者が生産性の高い化学染料を使用するようになった。江戸後期に創業した「染司よしおか」でも化学染料を使った時期があったが、戦後、徐々に古来の染料と技法に戻し、吉岡幸雄さんが5代目を継いだ時、すべてを植物染めに戻した。

「日本の色は300とも400とも言われるが、確実に色の識別ができるものは300余り。赤を出すのに、茜や蘇芳、紅花、ラックカイガラなどを彩り、濃度の違いなどいろいろな色相が作れる」という。時代によって流行色も変わる。江戸後期には、幕府禁止令の下で、町人たちは茶色や黒色といった抑えられた色相を作れるのみを「四十八茶目」と言われた。歌舞伎

工房に戻って10年。古法でのつくり、染料も媒染も自然界に由来するものを使つて「美しい風合いの」「重厚なスタイル」な色染め上げる。茜や刈安、藍などの自然の色を移し軒下で揺れる生絹は、光を通し、心を癒やかたにさせてくれる。「季節感や色で表すが、昔ながらの日本人の美意識」と、優美な伝統色の再現を目指す。



優しい色合いの生絹が光を通し、美しく広がる



植物染めの染料の原料(左上から右回りに刈安、茅、紅花、蘇芳、藍)

文 栗山圭子
写真 奥村清人